

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## A Study on Japanese NI and HE in "Amakusaban Feiqe Monogatari"

|       |                                                                                                                     |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 1985-12-31<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 安達, 隆一, Adachi, Ryuichi<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2124">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2124</a>           |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 「天草版平家物語」の表現

——助詞「に」「へ」の用法——

安 達 隆 一

「天草版平家物語」には、

池殿なぜに汝ははるかの旅に赴くに、見送らうとはせぬぞと、仰せらるれば、宗清申したには、そのおことちや。戦場へさへ赴かせられたれば、まつ先をかけませうが、これは参らずとも、苦しかるまじい。(巻Ⅳ・第十五)

資盛ははふはふ六波羅へ行つて祖父の清盛禪門にこの由を訴へられたれば(巻Ⅰ・第二)

資盛急いで御所に馳せ参つて信ふさを呼出だいて、この由を申せば(巻Ⅰ・第三)

という例に見られるように、助詞「に」「へ」の共存が認められる。この場合共存というのは、助詞「に」「へ」を相互に交換しても、その文法的適合性を直ちに否定できぬものに限定していうことにする。この共存現象が混用なのか、それとも規則性の認められる適切な用法なのかは、にわかには決定しがたい。また、右の「天草版平家物語」の本文に対応するとみなされる「百二十句本(斯道文庫蔵)」の本文は、

大納言何トテ汝ハ遙ノ旅ニ趣クニ見送ラシトスルソト宣ヘハ、弥平兵衛

申シケルハ、サン候戦場へタニ趣玉ハハ真先ヲ懸ヘク候カ、是ハマイラストモ苦ウモ候マシ

とあり、「旅に一旅ニ」「戦場へさへー戦場へタニ」とそのまま対応している。しかし一方では、

火のほの暗い方へ向うて、やはらこの刀を抜き出して（天草版平家物語 巻Ⅰ・第一）

火ノ衝暗方ニ向テ和ヲ刀ヲ拔出シ（百二十句本）

火のほのぐらき方ニむかてやはら此刀をぬき出し（岩波古典大系本平家物語）

のように、「天草本」の本文と相違する例もある。

「天草版平家物語」の本文と対応する箇所をそれぞれ比較してみると、助詞「へ」「に」の対応について、次のような類型が指摘できる。

Ⅰ 資盛ははふはふ六波羅へ行つて祖父の清盛禅門にこの由を訴へられたれば（巻Ⅰ・第二）

資盛六波羅へ行イテヲウヂ入道殿ニ訴へ申サル（斯道文庫百二十句本）

Ⅱ その後清盛、重盛に談合もめされず（巻Ⅰ・第二）

入道殿小松殿へハ仰セ合セス（百二十句本）

Ⅲ 胸打騒いで車より下りて門の中へさしいつて見られたれば（巻Ⅰ・第三）

車ヨリ下リテ内ヲサシ入リミ玉ヘハ（百二十句本）

車よりおり門の内にさし入り見給へば（古典大系本）

Ⅰは「天草本」「百二十句本」が同じであるもの、Ⅱは「天草本」の「に」が「百二十句本」では「へ」であるもの、Ⅲは「天草本」の「へ」が「百二

十句本」では「に」「へ」以外の助詞であるものである。このことは、「天草本」の助詞「に」「へ」の用法が必ずしもいわゆる原拠本の本文に依拠するとはかぎらぬことを示している。つまり「天草本」の用法には、原拠本に基づきながらも、「天草本」独自の原理、規則があることを示唆するといえそうである。そこで本稿では、「天草版平家物語」における助詞「に」「へ」の共存現象について、その在り方を中心に考察してみようと思う。「天草本」の用法の検討にさきだって同じ三部作の一つである「天草版伊曾保物語」の助詞「に」「へ」の共存現象について考察しておくことにしたい。論の中心は、「天草版伊曾保物語」の助詞「に」「へ」の共存に、ある種の規則が認められるかどうかということにある。

## 二

「天草版伊曾保物語」に認められる「に」「へ」共存の典型的な例は、次のような例である。

- (1) かの勅使と連れてリヂヤの国へ赴いた。(429-14)

と言うてイソポはエジツトに赴いた。(436-9)

- (2) 「只今賞翫せうずれども、風呂へ入れば、その風呂上りの為に蓄へおけ」とあつて……その身は風呂に入られた。(410-7)

- (3) 或る野人の許に行つて右の様を語れば(501-6)

少しも承引せいで、けんもほろろに言い放いて親類の許へ行つて退けた。  
(424-2)

助詞「へ」「に」に対応する動詞は、(1)「赴く」、(2)「入る」、(3)「行く」であって、この観点からみるかぎり、両者の差異は判別しがたいといわざるをえない。

「天草版伊曾保物語」の「に」「へ」の用法について概観する前に、「日本大文典(ロドリゲス)」の記述するところにふれておく。

助辞 Ye (へ) を伴って何へといふ意を示す名詞の後か、助辞 Yori (より), Cara (から) を伴って何よりといふ意を示す名詞の後かに、或実名詞が直に続く場合には、これらの助辞に属格の助辞 No (の) をとる。(何へとか何よりとかいふ運動に関する属格)

この助辞については余り注意すべき事がない。第一の意味は、運動を意味する動詞と一緒に、これこれの方向へといふ意味を表す。(助辞の構成)

この記述から判断するかぎり、助詞「へ」は運動を意味する動詞と結合し、ある方向性を示すという機能が指摘できる。一方、助詞「に」に関しては、

ある場所に存在することを意味する助辞 De (で) か、Nite (にて) かの後に、ある実名詞が続く場合には、それらの助辞は属格の No (の) をとる。この No (の) は Ni (に) へは続かない。(静止に関する属格)

副詞 Izucuni (いつくに) を用ゐて問ふ場合、即ちある場所に居ること、留まること、住むこと、又は、ある事柄をする事等に就いて言ふ場合には、その在る場所とか、その動作の行はれる場所とかを示す名詞に助辞 Ni (に), Nite (にて), De (で), Nivoite (に於いて), Niitatte (に至って) の中のどれかを添へて用ゐる。(場所に関する言ひ方)

などの記述からすると、静止もしくは場所を示すという機能を有することになる。これをまとめると、

助詞「へ」——運動性、方向性

助詞「に」——静止性、空間(地点)性

という差異になるであろう。

ロドリゲス大文典のこのような記述を参考にして、具体的な用法について

検討を加えてみよう。

### 1 <方へ>

- (1) 狐驢馬を謀つて括りを掛けた方へ連れて行けば (498-10)
- (2) いと易い儀ちや、急ぎ我が方へおりやれ (455-17)
- (3) この儀を口惜しう思ひ、鷹の方へ行つて言ふは (455-12)

右の用例はいずれも「方」という名詞に助詞「へ」が下接する例である。「天草版伊曾保物語」では、方向性を意味する典型としての名詞「方」には、すべて助詞「へ」が下接している。これに対して

### 2 <傍に>

- (1) 面々の傍に置かれた犬どもを渡し与へらるるならば (429-8)
- (2) いかにも静かに柔軟な振りで馬の傍に歩んで来、 (459-2)
- (3) 羊の傍に近付いて言ふは (443-14)

のように、静止的な地点を意味する「傍」には、助詞「に」が下接する。この用例をみるかぎりでは、ロドリゲス大文典の記述に認められる両者の差異を実証しているといつてよい。ところが、

### 3 <許に><許へ>

- (1) 或る野人の許に行つて右の様を語れば (501-6)
- (2) 或る炭焼洗濯人の許に行つてみれば、家も広う、間々も多いを見て (473-9)
- (3) 少しも承引せいで、けんもほろろに言ひ放いて親類の許へ行つて退けた。 (424-2)

のように、「許」という名詞になると、助詞「に」「へ」が共存している。ちなみに「許」と結合する動詞を示すと、

——許に 招く・行つてみる・見舞ふ・行く

——許へ 消息して言い遣る・請侍する・行く

とあって、その差異は必ずしも明確ではない。一見するかぎり、両者の混用とうけとられそうである。

#### 4 <に赴く><へ赴く>

(1) かの勅使と連れてリヂヤの国へ赴いた。イソボ程なりリヂヤの国に  
罷り着き (429-14)

(2) と言うてイソボはエジツトに赴いた。かの国の人どもイソボを見て  
(436-9)

(1)(2)は動詞がいずれも移動を意味する「赴く」という語であるにもかかわらず、助詞は(1)が「へ」、(2)が「に」となっている。この二文を比較するかぎり、両者の差異は認めがたい。しかし、後続の文までを含めて解釈すると、両者の間に差異のあることが判明する。

(1)においては、前文「赴く」に対して後文は「罷り着く」である。つまり前文は「移動性（運動性）」と「方向性」を表すのに対して、後文は「静止性（帰着性）」「地点性」を表すものと考えられる。前文が移動の方向のみを意味するがゆえに、後文ではあらためて帰着を表す必要が生じたといっている。一方、(2)においては、後文は動詞「見る」であって、帰着を意味する動詞の使用はないと考えられる。つまり前文において既に移動の帰着性は表現されているということである。その帰着性を表現しているのが助詞「に」である。こう考えると、(1)(2)は決して混用ではなく、助詞「へ」「に」が機能の差異に基づいて使い分けられているとみなければならなくなる。

先に示した用例の「風呂へ入る」「風呂に入る」も同種の使い方として解釈できる。「風呂へ入れば」という言い方は、単に「風呂への方向性」を示すのであって、「入浴」を意味するのではない。「風呂に入る」の方は、用例に即して解釈すれば、そのまま「入浴」を意味することになる。「静止性」「地点性」ということから「入浴」という「状態性」を意味するのである。さらに「許に」「許へ」の相違も次のように説明できる。「許へ行って退けた」は「ある方向への移動」そのものを表し、「許に行行って語れば」は「語る」ことのできる状態、つまり「地点への帰着（静止）」を表すということになる。

こうしてみると、一見混用かと疑われる用例も、基本的な機能に忠実に使用されていることがわかる。「天草版伊曾保物語」の助詞「に」「へ」は、決して恣意的ではなくて、ロドリゲス大文典に認められる原理が貫かれていると判断できるのである。とすると、「天草版平家物語」の用法もこれに準ずるものではないかという視点が設定できることになる。換言すれば、「天草版平家物語」における助詞「に」「へ」の用法について、「天草版伊曾保物語」の原理を基準とすることができるということである。

### 三

「天草版伊曾保物語」の助詞「に」「へ」には、

助詞「に」 静止性、空間（地点）性

助詞「へ」 運動性、方向性

という違いがあり、この基準に基づいて忠実に使用されていることが判明した。この基準を一つの指標として、「天草版平家物語」の用法を検討することにした。

空間を意味する名詞に助詞「に」「へ」の下接する例から、考察をはじめることにする。具体的には、＜トコロニ・トコロへ＞＜方ニ・方へ＞＜許ニ・許へ＞という例である。

#### 1 <トコロニ・トコロへ>

- (1) 車より降りらるところへ、貞能つと寄て（巻Ⅰ・第四）

仰せらるところに、康頼といふ人……申されたれば（巻Ⅰ・第三）

- (2) さうあるところへ西八条から使ひしきなみに立つたれば、宰相行き向うてこそともかうもならうずれと言うて（巻Ⅰ・第五）

さうするところへ五人の兄弟たちが門のうちへうち入つて……と面々言ひやうてすすめられたれば（巻Ⅲ・第七）

さうあるところに福原のお使ひやがて今夜鳥羽まで出でさせられいと申したれば（巻Ⅰ・第八）

さうするところにこの謀叛にくみしたほどの者をことごとく搦め捕つて  
参つてござる。(巻Ⅰ・第三)

(3) そのところへ行き向うたほどの者をみな(巻Ⅰ・第二)

紫野といふところに忍うで居たに見せれば(巻Ⅰ・第九)

〈トコロ〉に助詞「に」「へ」の下接する例をあげると、上のような用法が認められる。(1)は接続助詞に近い用法、つまり〈トコロ〉がいわゆる形式名詞と称せられる用法である。この例に対応する国字本の本文は、原則として「連体形+に」という形式になる。(2)は接続詞として使用される例である。この種の表現に対応する国字本の本文は認められない。(3)は〈トコロ〉が空間としての実質を意味する名詞の用法である。

用例(1)の「ところへ」と「ところに」を比べてみよう。「ところへ」は、移動を示す動詞「寄る」と共存して、「トコロへ——寄ル」という意味関係が存在する。これに対して「ところに」は、移動を意味する動詞との関係が認められない。共存する動詞は「申す」であって、直接の意味関係は存しない。「ところへ」が移動性を意味することで、空間としての実質を保持するのに対して、「ところに」は空間としての実質を希薄にする。接続助詞的用法に近づくことになるゆえんでもある。この相違はいうまでもなく、「へー運動性・方向性」「にー静止性・地点性」という原理に由来する。

接続詞は語の実質の意味が空白となり、因果関係という論理の関係の表示を機能とする語である。したがって接続詞として完全に機能すればする程、「に」「へ」の意味上の相違は希薄になるはずである。また「ところ」の意味の実質が希薄になるに伴って、指示語「さう」の指示内容も空間的、場所的実質を希薄にする。用例(2)に関していうと、右の傾向は「さうあるところに」「さうするところに」と、助詞「に」の含まれる例に顕著である。「さうあるところへ——西八条から——立つた」という用法には、「へー移動動詞」という意味関係が基本的には存在している。一方、助詞「に」を含む用例には、これが認められない。

用例(3)では、「ところ」が空間、場所としての実質的意味を有するところに特徴があった。この例では、「に」―静止性」「へ」―方向性」が最も明確に受け取れる。「ところへ」―行き向う」「ところに」―忍うで居る」という対応である。「へ」は明らかに移動の方向を表し、「に」は静止的空間（地点）を表している。＜トコロニ＞＜トコロヘ＞は、明らかに「に」「へ」の機能の差異に基づき、混用されることはないということになる。

## 2 ＜方ニ＞＜方ヘ＞

方向を表す語には＜方＞がある。これに助詞「に」「へ」の下接する用法をとりあげる。まず例を示そう。

- (1) 院をも内をもとり奉つて、西国の方へ御幸をなし奉らうと存ずると  
(巻Ⅲ・第六)

弓を打ち切つて杖をついて、南都の方へ落ちゆいたときこえまらした。  
(巻Ⅱ・第六)

- (2) 平家の方にわれと思はう人々は馳け出させられい (巻Ⅱ・第五)

平家の方に先陣をした忠清が大將に申したは (巻Ⅱ・第六)

上の用例(1)(2)を比較すると、「方へ」となる(1)の例は、すべて「方へ」―御幸をなす」「方へ」―落ちゆく」のように、方向・移動を示す動詞と共存する。一方、(2)の「方に」は静止的な地点を意味している。用例は「平家の側デハ」という意味である。この規則に例外は存しない。「方に」類似する用例に「傍」がある。「傍」に助詞の下接する例は、

寂光院の傍に方丈なる御庵室をむすばせられて (巻Ⅳ・第二十三)

のように、すべて助詞「に」が下接し、「へ」の下接する例は認められない。しかも上の例でもわかるように、静止的な地点を表すものである。なおこの用法は、「天草版伊曾保物語」のそれともほぼ一致する。

## 3 ＜許ニ＞＜許ヘ＞

空間・地点を意味する「許」には、助詞「に」「へ」の両者が下接する。

- (1) 行綱清盛の許へ参つて、行綱こそ申さうずる子細あつて、これまで参

つたと言はせたらば（巻Ⅰ・第三）

(2) 今姫御前ばかり奈良の伯母御の許にござる。（巻Ⅰ・第十二）

上の用例(1)(2)に関しては、これまでに述べてきた規則がそのまま適用できる。つまり(1)は「方向性・運動性」を示す動詞「参る」と共存し、(2)は「静止性・地点性」を示す動詞「居る」と共存する。「許」と共存する動詞を示すと、次のようになる。

——許に ある・あづける・立ち寄る・つかはす

——許へ 参る・送る・出る・言ふ

などの動詞である。こうしてみると、「に」「へ」のもつ機能の差異がここでもほぼ規則的に認められるといえよう。

#### 四

空間を意味する名詞に助詞「に」「へ」の下接する用法について検討を加えた。続いて移動を意味する動詞と助詞「に」「へ」とが共起する用例から、助詞「に」「へ」の用法について考察してみようと思う。

#### 4 <＝赴く><へ赴く>

(1) 妻子にも別れ、見送る人もなうて、越路の旅へ赴かせられた心のうち  
はあはれなことぢや（巻Ⅳ・第二十三）

見もなれぬ兵どもに具せられてけふをかぎりに都を出でて、波路はるかに  
に赴かれた心のうちおしはかられて、まことにあはれな（巻Ⅰ・第七）

(2) 今生でこそあらうずれ、後生まで悪道へ赴かうことこそ悲しけれと言  
うて（巻Ⅱ・第一）

親の命をそむくまじいとて、つらい道に赴いて、ふたたび憂き目を見た  
ことの心憂さよ（巻Ⅱ・第一）

「赴く」と共起する諸用例のうち、特に表現の類似するものを示す。用例(1)(2)についていうと、「越路の旅へ」「波路はるかに」がきわめてよく似た表現であり、さらに「悪道へ」「つらい道に」とは、ほとんど区別が付き難い表

現である。

ところで用例(1)についてみると、「赴く」が共起する用例で、「越路の旅」のように具体的な地名を表す場合は、例外なく助詞「へ」が下接する。

紀の路へ・南海道へ・瀬田の方へ・北国へ・奈良へ・南都へ——赴く  
などがそれである。具体的な地名として移動する地点が明確な表現は、すべて「——へ赴く」ということになる。これに対して、「——に赴く」は

波路はるかに・軍の場に・つらい道に・配所に——赴く  
などであり、いずれも修辭的価値を伴う対象となっている。具体的な地名が目的地そのものの以外に、含意する意味をもたぬのに対して、「波路はるかに」は、「遠く、ツライ」などという心情を内包する。「——へ赴く」が動作そのものの表現であるとすれば、「——に赴く」は「ソノヨウナ状態ニナル」とでもいう表現である。

もしこのような表現法上の差異が認められるならば、用例(2)「惡道へ」は、これからその方向へ向うことをも含めて、具体的に例証しうる「惡道」への移動を意味する。それに対して「つらい道に」は、「ツラク、心憂ク感ズル状態」になることを意味するといえる。「——へ赴く」が運動性ということにおいて、動的な表現であるとすれば、「——に赴く」は静止性ということにおいて、静態的、状態的表現であるということになる。

##### 5 <ニのぼる><へのぼる>

(1) それによつてある時また忠盛備前の国から都へのぼられてござつたに  
(巻Ⅰ・第一)

(2) 殿上へのぼることを許されたれども (巻Ⅰ・第六)

山の方が覺束なさにはるかに分け入つて、峰へのぼり、谷にくだれども、  
たづねも会はず (巻Ⅰ・第十二)

上への移動を表す動詞に「のぼる」「あがる」がある。この動詞と共起する助詞「に」「へ」について述べる。用例(1)は「都」という具体的な地名を意味する名詞に「へ」の下接する例である。動詞「のぼる」が助詞「へ」と

共起する表現は、「天草版平家物語」ではすべて固有名詞に限られる。例えば

都へ・京へ・福原へ・高野へ・高尾へ——のぼる

などである。一方「にのぼる」は、例(2)に示したように、「峰」「殿上」などと関係している。まず「殿上にのぼる」とは、具体的、個別的動作として「殿上へ移動スル」ことを意味するのではない。「殿上にのぼる」とは「昇殿」とおきかえてもよく、一つの資格を意味するといわねばならない。これに準じて考えると、「峰にのぼる」とは「峰ニ向ツテ移動スル」ことを意味するのではなくて、「峰ニノボッタ状態」になることを意味する。ついでにいうと、「谷にくだる」も「谷ニ向ツテ移動スル」ことではなくて、同じく「谷ニクダッタ状態」になることにほかならない。そして「峰にのぼり、谷にくだる」の対句的表現でもって「一所懸命苦勞スル・必死ニナツテ探ス」という修辭的な価値を含意するのである。一連の動作の繼起的表現ではなく、靜態的な状態の表現である。ちなみにこの用例において、「へ」と「に」を入れかえてみると、その相違が一層明確になるであろう。このことは「にあがる」「へあがる」についても、そのまま適用することが可能である。

#### 6 <ニあがる><へあがる>

- (1) 扇はこらへいで三つにさけ、空へ上がり、風に一もみもまれて、海へざつと散つた（巻Ⅳ・第十七）

俊寛は高い所に走り上がつて、沖の方を招かれた体かの松浦小夜姫が唐船を慕うてひれふしたもこれにはすぎまいと見えた（巻Ⅰ・第十）

- (2) 能登殿二百人ばかりで同じ渚へ上がらるれば、越中の次郎兵衛が進み出て申したは（巻Ⅳ・第十六）

俊寛はせん方なさに渚に上がつて、倒れ伏いて幼い者の乳母や母などを慕ふやうに、足摺りをして（巻Ⅰ・第十）

用例(1)(2)はそれぞれ、「にあがる」「へあがる」の共存とみなしうる表現である。(1)の「へあがる」は、「要を射られた扇」が一瞬にして海に散る一連の動作を表現した箇所である。「空へあがる」は上空への動作を示して、続い

て「海へ散る」は、一気に下降する動作を表現する。このダイナミックな表現は、助詞「へ」の下接によって可能となるのである。一方「高い所にあがる」は、「あがる動作」そのものを表現するのではなく、「足摺り」をする地点に到達し、「高い所にあがっている状態」を表現する。用例(2)の「渚へ」「渚に」も同前である。「渚へあがる」は「渚への移動」を表し、「渚にあがる」は「渚に移動し、そこにいる状態」を表すことである。

一連の移動動作を意味する動詞と共に「へ」「に」の表現には、上に述べてきたような差異が認められる。そしてこの差異が冒頭において指摘した助詞「に」「へ」の機能の差異に由来することは、いうまでもないことである。「天草版平家物語」は、助詞「に」「へ」の差異を決して混用することなく、巧みに利用しているとさえいえるのである。本稿をすすめるにあたって冒頭に引用した「天草版平家物語」と対応する「国字本平家物語」の本文との関係においても、この原理と基準に基づいて解釈することができる。

Ⅰの例については、「六波羅へ行つて祖父の清盛禅門に——訴へられたれば」ということで、明らかに移動を表す動詞「行く」と共存し、移動の方向と運動を意味する用法である。さらに、「清盛に——訴へる」という言い方は、「話ヲスルコト」であって直接の移動を伴う動作ではない。この「へ」「に」の使い分けはこの種の用法の基本的なものと見える。対応する「百二十句本」の本文も「天草本」と同じである。

Ⅱは「天草本」が「に」,「百二十句本」が「へ」になっている例である。「天草本」の用例は「重盛に——談合もめされず」という用法で、これはⅠの「清盛禅門に——訴へる」という言い方と同じである。この例の助詞「に」は「——ト談合ス」とでもいえることで、「へ」よりもむしろ「と」に近い。対応する「百二十句本」は「へ」であるが、これまでに述べてきた基準からいうと、「天草版平家物語」の用法の方が理にかなっている。

Ⅲの用法になるとかなり微妙な差異となり、安易に解釈するべきではないのかもしれない。しかし「天草版伊曾保物語」の類例を参考にするとともに、

「天草版平家物語」の用法を検討した結果を考え合せると、この基準に基づく解釈が可能であり、かつ許されるものと考ええる。あらためて例示をしよう  
えで私見を述べることにしたい。

Ⅲ 胸打騒いで車より下りて門の中へさしいつて見られたれば（巻Ⅰ・第三）

車ヨリ下リテ内ヲサシ入リミ玉ヘハ

車よりおり門の内にさし入り見給へば

「天草本」の「へ」に対応する「百二十句本」は「ヲ」,「古典大系本」は「に」と、それぞれが異っている。「天草本」「古典大系本」は「へ」「に」ということで、「百二十句本」の「ヲ」がいささか趣を異にすることになる。この違いは共起する動詞をどう見るかということに帰着する。

門の中へ——さしいつて（見られたれば）（天草本）

門の内に——さし入り（見給へば）（古典大系）

門ヲ——（サシ入り）ミ玉ヘハ（百二十句本）

という共起関係になるはずである。つまり「天草本」「古典大系本」は動詞「さし入り」との共起関係を重視し、「百二十句本」は「ミ玉ヘハ」との共起関係を重視したものということが出来る。とすると「天草本」の「へ」と「大系本」の「に」との対応関係の検討が必要になる。ただし「百二十句本」および「古典大系本」の助詞が「ヲ」であり、これに対応する「天草本」の助詞が「へ」である例が認められる。

総別劔を帯して座敷につらなり、兵杖をたづさへて内へ出入りすることは（巻Ⅰ・第一）

夫レ雄劔ヲ帯シテ公宴ニ列シ、兵杖ヲ給ハツテ宮中ヲ出入スルハ（百二十句本）

引用はしないが、「古典大系本」も「宮中を出入する」とあって、「百二十句本」と同じである。この用法からすると、「百二十句本」「古典大系本」は動

作の継続性、つまり動作の経過を重視したものと推察される。現代語の「橋ヲ渡ル」「道ヲイキキスル」などの用法と同じである。助詞「を」と助詞「へ」の対応については、ここではこれ以上はふれないことにしたい。Ⅲの「天草本」と「古典大系本」の違いについては、ここまで述べてきた原理を援用すると、

「天草本」の例Ⅲは「ある方向への移動」そのものを表すということになる。少なくとも「天草本」の編者は、そう意識したといえる。またこれは「天草版伊曾保物語」の

少しも承引せいで、けんもほろろに言ひ放いて親類の許へ行つて退けた。

(424-2)

という用法と同じである。こうしてみると、対応する「国字本」の本文のいかににかかわらず、「天草本」独自の原理に基づいて、助詞「に」「へ」を使いわけていることがわかるのである。

「天草版伊曾保物語」に認められる助詞「に」「へ」の機能的差異は、「天草版平家物語」にもそのまま適用できるものである。原拠本の表現がどのようなものであれ、「天草版平家物語」の口訳者は、「天草本」に通ずる原理、規則でもってその表現に臨んだ。それは単に規範的な言葉を重んじるというのみでなく、もっと積極的に表現を形成する原理、規則であると思われる。規範性を守るという保守性ではなく、ふさわしい表現を確立するという積極性において原理を通してに、あらためて注目する必要があると思われる。原拠本との比較については、かりに完全に一致する本文が存在しないとしても、積極的にすすめねばならぬことを示唆するようである。いずれにしても、助詞「に」「へ」の使い分けは、「天草版平家物語」の口訳者たちの言語感覚の鋭さ、知的水準の高さをうかがわせるものといわねばならないであろう。